



Title	ヴェーダ文献におけるX-bhūyam √bhū構文の用例と解釈
Author(s)	竹崎, 隆太郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2026, 59, p. 81-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴェーダ文献における *X-bhūyam* √*bhū* 構文の 用例と解釈

竹 崎 隆太郎

キーワード：Vedic/Upaniṣad/Inhaltsakkusativ/ *idám* √*as* / √*bhū* 構文

§ 1. 導入・問題の所在

名詞複合語 *X-bhūya-* neut. 「X になること」は、形態論的には、アクセントを持つ弱階梯の動詞語根に一次接尾辞 *-ya-* を付した語を後半に持つ中性複合語 e.g. *brahmódya-* (<[°]*a-údyā-*), *brahma-cārya-* etc. (OERTEL 1926, pp. 66–68¹⁾ § 29, Ex. 32G, 2.b); AiG II-2, pp. 827–829 § 664a–c; 後藤 1994b, p. 43, n. 6) のタイプに属する。

複合語 *X-bhūya-* neut. の用例は、OERTEL 1926, p. 67f.²⁾ で収集され、それに対して更に RENOU 1959, p. 92 [= 1997, vol. 2, p. 722], n. 157 が Cl.Skt. の例を追加している：要するに、*X-bhūya-* という複合語は、AV, VS; MS^p, KS^p; BĀU, KauṣU ≈ ŚāṅkhĀ; BaudhŚS (DvaidhaS, KarmāntaS)³⁾ ; Aṣṭ 3.1.107⁴⁾ *bhuvo bhāve* に在証されるのみならず、それ以降の MBhār, Cl.Skt. などにおいても用

- 1) ここに挙がる諸例のうち、零階梯（あるいはその代わりに用いられる標準階梯 e.g. [°]*-sādyā-*）の動詞語根の母音にアクセントがある neut. のものを参照。
- 2) なお、*nibhūya-pā-* VSM 22.20 = VSK 24.7.3; TS^m 7.3.15.1; MS^m 3.12.5 [p. 162, l. 6]; KS [Aśvamedha]^m 3.5:159.18; *nibhūya-pū-* KS^m 34.16:47.4 の特に前肢の解釈は不確実である (cf. SHARMA 1959–1960, p. 172)。
- 3) 詳細については、本論文 n. 45 を参照。
- 4) Aṣṭ 3.1.107 に対する Kās は、*brahmabhūyam gataḥ brahmatvaṃ gataḥ. devabhūyam, devatvaṃ gataḥ* と例示する。

いられ続ける。

注目すべきは、この *X-bhūyam* タイプの複合語が動詞 $\sqrt{bhū}$ と共に、文の主語 (nom. sg.) ではなく、述部として用いられている例が存在することである。本論文では、これを *X-bhūyam* $\sqrt{bhū}$ 構文と呼ぶことにする。既に OERTEL 1926, p. 68 で、そのような例が収集されている。しかし、この構文の意味的・文法的分析 (本論文 §4.) については、OERTEL 1926, p. 68 は詳しく踏み込んでおらず、課題として残されている。分析の準備作業として、用例の再検討 (§2.)、および競合する構文の検討 (§3.) が必要となる。本論文では、これらの問題を論じていく。

§2. *X-bhūyam* $\sqrt{bhū}$ 構文の用例

以下では、この *X-bhūyam* $\sqrt{bhū}$ 構文と思われる例を、確実な 3 例と不確実な 2 例とに分類したうえで挙げ、再検討する。[例 1] – [例 4] は既に OERTEL 1926, p. 67 に指摘される。

§2.1. 確実な例

以下の三例は、OERTEL 1926, p. 67 に指摘されるとおり、確実と思われる。

[例 1] BĀUM 5.13.1, 2 *ekadhābhūyaṃ bhūtvā*

対話篇の冒頭で、ブラフマンは *ánna*-「食物」であるとする説と、*prāṇá*-「氣息 (呼吸)」であるとする説が否定される。その理由は、*prāṇá*-「氣息 (呼吸)」が無ければ *ánna*-「食物」は腐敗し、*ánna*-「食物」が無ければ *prāṇá*-「氣息 (呼吸)」は乾くから、というものである。それゆえ、両者は一体であるとされる。Prāṭṛdā- が上記の説を肯定し、*ánna*-「食物」と *prāṇá*-「氣息 (呼吸)」する形で父に問かけると、父はそれを否定し、*ánna*-「食物」= *ví*、*prāṇá*-「氣息 (呼吸)」= *rám* とする説を述べる。この対話篇における議論の全ての理路が一見して明瞭であるわけではないものの、DEUSSEN 1897, p. 495 によれば、Prāṭṛdā- の父は、*ánna*-「食物」= *ví* と *prāṇá*-「氣息

(呼気)」= *ram* を合わせることで、*ví* √*ram* 「放棄する」 (“entsagen”)⁵⁾ ことの教えを説いているという。以下に掲げるのは、その対話篇の中間部分である。

BĀUM 5.13.1, 2 (= ŚBM 14.8.13.1, 2 [~ BĀUK 5.12.1 = ŚBK 17.5.12.1])

Cf. OERTEL 1926, p. 67

[...] *eté ha tv evā devāte ekadhābhūyaṃ bhūtvā paramātām gacchataś*⁶⁾. ||1||
*tād dha smāha prātrḍāḥ pitāraṃ. kīm svid evāivaṃvidūṣe*⁷⁾ *sādhū kuryāṃ.*
kīm evāsmā asādhū kuryāṃ iti. sā ha smāha pāṇinā. mā prātrḍa. kās tv
*ēnayor ekadhābhūyaṃ bhūtvā paramātām gacchatīti*⁸⁾. ||2||

一方で、他ならぬ例のこれら二つの神格たち (i.e. *prāṇā*-「氣息 (呼気)」と *ánna*-「食物」) は、一重になることをなつて⁹⁾ (i.e. 一重になるに至つて)¹⁰⁾、最上性へと行く¹¹⁾ ことになる¹²⁾。||1|| そのことについて、*Prātrḍa*-¹³⁾ は父に言っていたものであった：「一体まさに何を、そのよ

- 5) Cf. PW s.v. *ram* + *vi*, 2). なお、ŚBM 11.6.3.10 ~ 14.6.9.9 = BĀUM 3.9.9; GopB 1.1.33 でも *ánna*- と *prāṇā*- が一組で言及されるが、この動詞は現れない。
- 6) BĀUK ed. PIMPLAPURE, ed. SWAMINATHAN *gacchataś*.
- 7) BĀUK ed. PIMPLAPURE ms. N (n. 10 ad loc.) *evāivaṃvidūṣe* (= BĀUM) :: ed. PIMPLAPURE 本文, ed. SWAMINATHAN *evāivāṃ vidūṣe*.
- 8) BĀUK ed. PIMPLAPURE, ed. SWAMINATHAN *gacchatīti*.
- 9) 逐語訳：「両者の一重なりをなつて」。
- 10) なお、Śamkara 注 (8 A.D. [cf. HARIMOTO 2006]) ad BĀUK 5.12.1 は、当該の BĀUK 5.12.1 *ekadhābhūyaṃ bhūtvā* を *ekadhābhāvaṃ gatvā* 「一重性に至つた (√*gam*) のち」と言い換えており、「(bhāva- [cf. Aṣṭ 3.1.107] を用いた) 抽象名詞 + √*gam*」と同義と理解している。Cf. OERTEL 1926, p. 69, ll. 1-4.
- 11) 表現 *paramātām* √*gam* は、本箇所 (BĀUM 5.13.1, 2 [= ŚBM 14.8.13.1, 2] ~ BĀUK 5.12.1 [= ŚBK 17.5.12.1]) の他に、AiB 8.14.4; 8.19.2; ŚBM 1.6.4.17; 3.1.1.12; 14.4.2.23 (= BĀUM 1.4.23) にも在証される。
- 12) 或いは、DEUSSEN 1897, p. 495 の訳のように、疑問文 (「なるのか?」) として理解する可能性もある。
- 13) Cf. MACDONELL / KEITH II, s.vv. *Prātrḍa*, *Pratṛd*. この名前は王族を思わせる (cf. MACDONELL / KEITH II, s.vv. *Pradardana*, *Prātardani*)。

うに知っている者へと、正しいこととして、私は為しうる¹⁴⁾のか。まさに何を、当の者（そのように知っている者）へと、正しからぬこととして、私は為しうるのか」と。彼（父）は掌を伴って¹⁵⁾、言っていたものであった：「[そのように言う] な（含意：そのような無意味な問いを問い掛けるな）、Prāṭṛdāよ¹⁶⁾。一方で、誰が両者（直前に出てきた *ánna-* と *prāṇá-*）の¹⁷⁾ 一重になることをなつて⁹⁾ (i.e. 一重になるに至つて)、最上性へと行く¹¹⁾のか」と。||2||

この *ekadhābhūyaṃ* という複合語は、**ekadhā bhavataḥ/ bhavati* 「一重になる」という文を背景に持つ。この文は、KauṣU 3.3, 4.20 *athāsmiṃ prāṇa evaikaadhā bhavanti* |（夢のない睡眠あるいは死に際した場合に、）「そうすると、他ならぬ当の氣息（呼気）において、それら（生体諸機能）は一つになる」に在証される。

[例2] KauṣU 3.2 (≈ ŚāṅkhĀ 5.2) *ekabhūyaṃ ... bhūtvā*

KauṣU 3.2 で、インドラは、プラタルダナに *prāṇo 'smi prajñātmā* 「私（インドラ）は、認識を本体とする氣息である」と教える。その後で、生体諸機能——言語機能・視覚・聴覚・思考・氣息（呼気）——は、各々個別にというよりも寧ろ、全員一丸となって認識行為を行う、とする説への言及がなされる¹⁸⁾。なお、その後でインドラは、この説は正しいけれども、生体諸

14) *sādhukṛtyā* 「正しい行い」については、後藤 1994a, p. 47, n. 8; Gotō 1996, p. 96 n. 24 を参照。

15) 即ち、否定の手ぶりを伴って (DEUSSEN 1897, p. 495)。

16) Cf. HOFFMANN 1967, p. 102f. 訳：“(sprich) nicht so (d.h. stell keine so unsinnige Frage), Prāṭṛdā.”

17) 概ね DEUSSEN 1897, p. 495 の解釈に従う。

18) 本箇所は、Śāṅkarānanda による *Dīpikā* 注 (in ed. COWELL) および tr. COWELL, tr. DEUSSEN などによれば Prātardana による台詞と解釈されている。原文においては明示的でない。BODEWITZ 2002, p. 47f. の訳では、インドラの台詞が引き続いてい

機能の中では氣息（呼吸）が最も優れている、との旨を述べる。

KauṣU 3.2 ed. COWELL 本文 (≈ ŚāṅkhĀ 5.2)

*tad dhaika āhur ekabhūyaṃ vai prāṇā gacchantīti. na hi kaś cana śaknuyāt sakṛd vācā nāma prajñāpayitum cakṣuṣā rūpaṃ śrotreṇa śabdaṃ manasā dhyānam. ekabhūyaṃ vai prāṇā bhūtvaikaikam etāni sarvāṇi prajñāpayantīti*¹⁹⁾. *vācaṃ vadantīm sarve prāṇā anuvadanti. cakṣuḥ paśyat sarve prāṇā anupaśyanti. śrotraṃ śṛṇvat sarve prāṇā anuśṛṇvanti. mano dhyāyat sarve prāṇā anudhyāyanti. prāṇaṃ prāṇantaṃ sarve prāṇā anuprāṇanti.*

そのことについて、或る人々は言っている——— 一つになることに、生体諸機能たちは赴くのだ、と。(人をして)一度に言語機能によって名称を²⁰⁾、視覚によって姿形を、聴覚によって音を、思考機能によって考えを認識せしめる²¹⁾ことは誰もできないだろうからだ。生体諸機能たちは、一つになることをなつて²²⁾ (i.e. 一つになるに至つて)、(人をして)これら全てのものたち²³⁾それぞれ²⁴⁾を認識せしめるのだ、と。

と解しているようである。

- 19) KauṣU 3.2, ŚāṅkhĀ 5.2 の諸刊本の読みの相違点は、[1] *bhūtvā* の有無、[2] *sarvāṇi* と *etāni* との順序、[3] *sarvāṇi* / *bhūtvā* の後の *eva* の有無、[4] *prajñāpayanti* の語根母音の長短、[5] 文末の *iti* の有無である。これらの諸刊本の編集方針および相互関係については、KAJIHARA 2011, p. 52, n. 35 を参照。
- 20) 或いは、*caus.* の行為者を指す *instr.* と理解する (BODEWITZ 2002, p. 48, n. 167) 場合、「言語機能をして名称を…(残りも同様)…認識せしめる」のようになる。
- 21) 動詞 *prá √jñā* の、Veda 文献における語義については、中村 2007 を参照。本箇所 KauṣU 3.2 ≈ ŚāṅkhĀ 5.2 の用例は、概ね「[事柄を]理解／認知／洞察する」(中村 2007, p. 127f., § 5-5, e.g. ŚBK 2.4.2.14) を意味する諸例に属するだろう。
- 22) 逐語訳：「一つなりをなつて」。
- 23) 前文に出てきた *nāman-*, *rūpa-*, *śabda-*, *dhyāna-* を指すと思われる。
- 24) *ekaikam etāni sarvāṇi* では、*ekaikam* (個々を謂う sg.) と *etāni sarvāṇi* (pl.) とが、性 (neut.)・格 (acc.) に関してのみ一致している可能性が高い (堂山 英次郎 p.c., 2025 年 9 月 9 日)。この現象の他の例として、RV 1.123.8cd *anavadyās ... ékaikā* (fem.

言語機能が音声を発すると、それに続いて全ての生体諸機能たちが音声
を発する。視覚が見ると、それに続いて全ての生体諸機能たちが見る。
聴覚が聞くと、それに続いて全ての生体諸機能たちが聞く。思考機能が
考えると、それに続いて全ての生体諸機能たちが考える。氣息（呼吸）
が呼吸する（息を吐く）と、それに続いて全ての生体諸機能たちが呼吸
する（息を吐く）²⁵⁾。

上記の *ekabhūyaṃ vai prāṇā bhūtvaikaikam etāni sarvāṇi prajñāpayantīti* の
箇所を読むは様々であり¹⁹⁾、例えば *bhūtvā* を含まない例として ed. ĀPATE

nom.pl, fem.nom.sg. [もし c *yōjanāniy* neut.acc.pl. と一致しているのでなければ]);
R̥V 3.29.15d *ēkaeko* ... *sām idhire* (masc.sg., 3.pl. [cf. c *kuśikāsa*]); R̥V 5.61.1b *yā*
ēkaeka āyayā (Padapāṭha *yē* | *ēkaḥ-ekaḥ* | ...; masc.nom.pl., masc.nom.sg., 2.pl.); R̥V
8.70.14cd *ēkamekam* ... *vatsān* (masc.acc.sg., masc.acc.pl.); MS^p 1.6.8 [p. 98, l. 17] _
ēkamekam havīm̐ṣi (neut.acc.sg., neut.acc.pl.); TB^p 1.1.6.7 *ēkamekam etāni havīm̐ṣi*
(neut.acc.sg., neut.acc.pl. [× 2]); TB^p 1.6.8.9 *ekaikam anūcīnāny* (neut.acc.sg., neut.
acc.pl.), *ēkaika* ... *anvāñcaḥ prāmīyate* (masc.nom.sg., masc.nom.pl., 3.sg.); ŚBM
10.2.5.13 *stómabhāgā ēkaikām* (fem.acc.pl., fem.acc.sg.); AiB 1.23.3, 4, 5 *upasado* ...
ekaikām (fem.acc.pl., fem.acc.sg.); AiB 6.19.1 *etāṃs trīn sampātān* ... *ekaikam* (masc.
acc.pl. [× 3], masc.acc.sg.); MBhār 1.147.21cd *sarvāṃs tān ekaikam* (masc.acc.
pl. [× 2], masc.acc.sg.); Divy 17 ed. COWELL / NEIL, p. 210, l. 18 (cf. 堂山 2012, p.
50) *ekaikā kathayanti* (fem.nom.sg., 3.pl.) などが挙げられよう。但し、*ēkamekam*,
ekaikam acc. の場合は、neut.acc.sg. 由来の adv.「それぞれ」(AVP 18.26.2a (?); PW
s.v. *ēkaika-* は Rām の例を挙げるのみ) を想定する可能性も排除できないかもしれ
ない。なお、他のやり方として、数までも一致する場合 (JB 2.236, 239, 274 *yān*
imān ekaikān stomān), gen. pl. と組み合わせる場合 (TB^p 1.6.8.9 *ekaika* ... *eṣām*;
JB 1.292, 2.433 *ekaikam* ... *eteṣām*; 2.95 *ekaikam* ... *eteṣām akṣarāṇām*; 3.101 *tāsām* ...
ekaikām; ŚBM 4.6.9.7 *tēṣām ekaika*; 21 *eṣām* ... *ekaika*; 10.5.3.3 *tēṣām ekaika*; ChU
6.3.3, 4 *tāsām* ... *ekaikām*; ŚāṅkhB 15.4 *tāsām* ... *ekaikaṃ padam*; ĀpŚS 21.19.14 *teṣām*
ekaikaṃ etc.) がある。

- 25) Cf. ŚāṅkhB ed. LINDNER 15.4 *tasmād dhīmaṃ prāṇaṃ sarve prāṇā anuprāṇanty*「まさにそれゆえ、ここの氣息（呼吸）に続いて、全ての生体諸機能たちが呼吸する（息を吐く）のである」。

Upaniṣadāṃ Samuccayaḥ, Ānandāśrama 1925, 本文, p. 119 *ekabhūyam vai prāṇāḥ | ekaikam etāni sarvāṇy eva prajñāpayanti* | がある。

ここでは、*prāṇāḥ* 「生体諸機能」について *ekabhūyam* √*gam* という構文を用いた後に、次は *ekabhūyam* √*bhū* という別の構文を用いている (OERTEL 1926, p. 68, l. 33)。文脈上、両者は同じ事態を指し示しており、両者の間に明確なニュアンスの差異は見出せない²⁶⁾。

この *ekabhūyam* という複合語は、**ekaṃ bhavanti* 「一つになる」 (*ekam* √*bhū* 構文²⁷⁾) という文を背景に持つ。

[例3] Śaṃkara ad BrahmaS 4.1.6, ed. Nirṇaya Sāgar 1927², p. 469, l. 5

- 26) 例えば, tr. COWELL, p. 162; tr. KEITH, p. 31; tr. BODEWITZ 2002, pp. 47, 48 は両者を共に “become one” という表現を用いて訳す。当該構文の Śaṃkara による理解 (本論文 n. 10) をも参照。
- 27) *ekaṃ* √*bhū* 「一つになる」という構文について。GOTÔ 1999, p. 136 § 2.7. は、JUB 4.22.10 *tad vā etad ekaṃ abhavat prāṇa eva* 「例のそれら (9 *prāṇa-*, *apāna-*, *vyāna-*, *samāna-*, *udāna-*) は一つになった、他ならぬ *prāṇa-* に」 (GOTÔ 1999, p. 133 § 2.3.) は①「述語名詞の数に動詞が従う」・②「述語名詞の性数に主語となる代名詞が従う」という原則 (cf. 本論文 § 4.2.4.) に従う一方、JB 3.360 *ekaṃ* が例外であることを指摘する。これらの原則に対する例外に当たる例は、実際、多数指摘できる：JB 3.360 *tāny ekaṃ abhavan* (HOFFMANN 1976b, p. 519; GOTÔ 1999, p. 136 § 2.7.); ŚBM 14.4.2.18 (= BÄUM 1.4.18; BÄUK 1.4.7) *ātra hy ètē sārva ekaṃ bhāvanti*; TĀ^m 3.11 *śatām śukrāṇi yātrāikaṃ bhāvanti | sārve veda yātrāikaṃ bhāvanti | sārve hōtāro yātrāikaṃ bhāvanti | [...] sārvaḥ prajā yātrāikaṃ bhāvanti* |; AiĀ^{śloka} 2.3.8.2d, 3d *tatra devāḥ sarva ekaṃ bhavanti*; JUB 3.33.5^{śloka}, 6^{śloka} *etā ekaṃ bhavanti*; ChU 7.4.1, 7.5.1 *nāmni mantrā ekaṃ bhavanti | mantreṣu karmāṇi ||*; KauṣU 3.4 *atha khalu yathāsyai prajñāyai sarvāṇi bhūtāny ekaṃ bhavanti tad vyākhyāsyāmaḥ*; Nir ed. SARUP 10.26 *tāny etasminn ekaṃ bhavanti; tāny asminn ekaṃ bhavanti*; 13.28=14.15 *tata etasminn āditya ekaṃ bhavanti; tāny etasminn ātmany ekaṃ bhavanti*; 13.32=14.19 *tāny etasminn ekaṃ bhavanti* (2 ×)。この *ekaṃ* √*bhū* という表現は、GOTÔ 1999, p. 136 § 2.7. の考える通り、おそらく文意不明瞭に陥らぬために、しばしば上記原則①②への例外となったようである。また、主語の性に関わらず、*ekaṃ* neut. sg. (直訳：「一つのもの」) が用いられることは注目される。

karmabhūyaṃ bhūtā 「(祭式) 行為の特質を帯びて」²⁸⁾ にもこの構文が出現するが、当該文献の時代の遅さ(紀元後8世紀後半²⁹⁾)から、本稿では詳しく扱わず、OERTEL 1926, p. 68 の記述に譲る。注意を要するのは、Śaṃkara は BĀUK 5.12.1 (§ 2.1. [例 1]) における *X-bhūyaṃ √bhū* 構文「～になるに至る」を知っていた(本論文 p. 83, n. 10) が、本個所で想定される意味はそれとは幾分異なるという点である。

§ 2.2. 不確実な例

[例 4] BĀUM 5.6.2 *satyābhūyaṃ ... bhavati*

satyám 「真実」という語を三音節に分解³⁰⁾ して *sa*³¹⁾ (= *satyá-*) + *tí*³¹⁾ (= *ánṛta-*) + *ám*³²⁾ (= *satyá-*) とした上で、虚偽 (*ánṛta-*) である真ん中の音節 *tí*³¹⁾ は、*satyá-* である前後の音節 *sa*³¹⁾ と *ám*³²⁾ とに囲まれて、真実 (*satyá-*)

28) OERTEL 1926, p. 68 は “assume the characteristics of *karman*” と訳す。Śaṃkara ad BrahmaS 4.1.6, ed. Nirṇaya Sāgar 1927², p. 468, l. 9 *karmātmaka-* と比較しうる。

29) HARIMOTO 2006, p. 106 は、著作年を紀元後756年と772年の間と想定する。

30) Up. 等において *satyám* を二／三音節に分解する例については、AiG I, p.113 § 98a Anm.; OLDENBERG 1888, p. 375; TSUJI 1952, p. 246 (13) f. [= 辻 1977, p. 34], no. 83; JAMISON 1986, pp. 165–167; DEEG 1995, pp. 353, 386f. を参照。用例は以下の通り：BĀUM 2.3.1 (= ŚBM 14.5.3.1) *sát + tyám* ~ BĀUK 2.3.1 (= ŚBK 17.2.3.1) *sát + tyát* (var. lec. *tyám* ed. PIMPLAPURE, p. 1004, n. 4 ad loc.); BĀUM 5.6.2 (= ŚBM 14.8.6.2) *sa (/sá) + tí (/tí) + ám* ~ BĀUK 5.5.1 (= ŚBK 17.5.5.1) *sa (/sá) + tí (/tí) + yám*; ChU 8.3.5 *sat + tí + yam*; AiĀ 2.1.5 *sa + tí + yam*; KauṣU 1.6 (≈ ŚāṅkhĀ 3.6) *sat + tyam*; TU 2.6.1 (= TĀ 8.6.1) *sát + tyát*。三音節に読む背景には、MIA の東部方言におけるがごとき発音が想定される (COWGILL, WITZEL in JAMISON 1986, p. 166f. [更に cf. WITZEL 1989, p. 181])。既に、RV 6.67.10c の break では、三音節の *satyá-* 或いは *saṭyá-* である可能性が、稀な例ではあるものの、韻律的に想定される。前者を想定するのは OLDENBERG 1909, p. 413 ad loc. (“Wohl”) である。後者の場合、「子音重複 + svarabhakti (?)」(後藤 2023, pp. 107 (58)–103 (62) § 5) の一例に数えられよう。

31) 厳密には、アクセントの有無 (*sa* か *sá* か、*tí* か *tí* か) は決定できない。BĀUM 2.3.1 ~ BĀUK 2.3.1; TU 2.6.1 (本論文 n. 30) のように、分解された全ての音節にアクセントがついていた可能性もある。

32) BĀUM は (°*m*) *ám* とする一方、BĀUK は (°*m*) *yám* とする。

となる旨を説く：

BĀUM 5.6.2 (= ŚBM 14.8.6.2) ~ BĀUK 5.5.1 (= ŚBK 17.5.5.1)

*té devāḥ satyám ity úpāsate*³³⁾ | *tád etát tryākṣaram*³⁴⁾ *satyám iti. sa*³¹⁾ *ity ékam akṣáram. tīty ékam akṣáram. ám*³²⁾ *ity ékam akṣáram. prathamottamé akṣáre satyám. madhyatō 'nṛtaṁ. tād etád ánṛtaṁ*³⁵⁾ *satyéna párigṛhītaṁ satyābhūyam evā bhavati. nāivamvidvāṁsam ánṛtaṁ hinasti.*

その神々は、(それ³⁶⁾を) 真実であるとして崇拝する³⁷⁾。そこで (?³⁸⁾)、三音節からなるのだ、*satyám*「真実」というのは：*sa*³¹⁾ というのは一つの音節である。*tī*³¹⁾ というのは一つの音節である。*ám*³²⁾ というのは一つの音節である。真実は、最初と最後の二つの音節である。虚偽が真ん中にある。例のその虚偽 (*tī*³¹⁾) は、真実 (*sa*³¹⁾ と *ám*³²⁾) によって取り囲まれて、まさに真実になるべきもの (?) となることになる。そのように知っている者を虚偽が傷つけることはない。

ŚBM (ed. WEBER, ed. “several learned persons”, ed. Kashi [後半]) も ŚBK (ed. PIMPLAPURE, ed. SWAMINATHAN) も *satyābhūyam* というアクセントを示し、“**satyabhūyam*”というアクセントを示す例は本文にも異読にも見出されない。これを OERTEL 1926, p. 68 は、異例なアクセント位置を持つ X-bhūyam √bhū 構文と解しているように見える。OERTEL 1926, p. 68 は、ŚBM 当該章 (14 卷) のアクセントに乱れが多い (AiG I, p. 295, ll. 16–19 § 252d; II-1, p.

33) BĀUM *ity úpāsate* を、BĀUK は *evópāsate* とする。

34) BĀUK は *tryākṣáram* とする。

35) BĀUK は *ánṛtaṁ* の後に *ubhayatāḥ* を挿入する。

36) この直前に語られる創出の系列のうちの、*bráhmaṇ-* が一可能性として想定しうるかもしれないが、確定はできない。

37) *úpa_ ās-*^{te}「侍る、崇拝する」を用いた Up. 等に見られる諸構文について、OERTEL 1926, p. 253f., § 60, Ex. 159, G.3. を参照。

38) *tád* を仮にこう訳した。

221 § 91f δ;) ことと、PW s.v. *bhūyam* の訂正提案 (**satyabhūyam*) に言及する。しかし、*satyābhūyam* の前後箇所のアクセントには問題がないことから、*satyabhūyam* のアクセントを正しいものとしてそのまま理解するほうが望ましくはある。その場合、主語 *ánṛtaṃ* と一致する形容詞として、外心複合語「真実を、なるべきもの (?) として持つ」あるいは内心複合語「真実になるべきもの (?)」(cf. ChU 5.10.6 *tadbhūya eva bhavati*³⁹⁾; OERTEL 1926, p. 69) などと解する可能性が考えられる。以上のことから、X-*bhūyam* √*bhū* 構文である可能性は、確実からは遠いということになる。

[例5] *MBhār brahmabhūyaṃ bhaviṣyasi*

シュカがヴィヤーサに、最も優れたダルマについて尋ねる。ヴィヤーサは、シュカにアートマンの知識を説く。次の詩節では、アートマンの知識を得た者が、最終的にどのような境地に至るかが述べられる。

MBhār ed. Poona 12.242.17ab (Mokṣadharma-parvan, Śukānupraśna)

uttamāṃ buddhim āsthāya 最高の知に至って、

(1) *brahmabhūyaṃ gamiṣyasi*⁴⁰⁾ 君はブラフマンとなることへと至るだろう。

(2) *brahmabhūyaṃ bhaviṣyasi* 君はブラフマンとなることをなる

(i.e. ブラフマンになるに至る) だろう。

39) ChU 5.10.6 *yoyo hy annam atti yo retaḥ siñcati tadbhūya eva bhavati* |「というのも、誰が(植物を)食物として食べ、(食べた食物を)精液として注ぐとしても、まさに、それ(食べて精液を注いだ存在)になるべき者となるから」(Gotō 1999, p. 134f. § 2.4.; 阪本(後藤) 2015, p. 66 を参照)における *tadbhūyaḥ* は「それになるべき者」(adj. nom.sg. masc.) と解される。本箇所について、更に、OERTEL 1926, pp. 62-71; AiG II-2, p. 830 § 664c γ における議論をも参照。

40) 諸訳:「最高の認識を得て、汝はブラフマンとの同一に至るであろう」(茂木 2001, p. 133); “You shall reach the state of identity with Brāhman” (EDGERTON 1965, p. 283)。同様の表現として、MBhār 1.56.28d (~ 18.5.35d), 13.61.33d, 14.42.46d *brahmabhūyaṃ sa gacchati*; 13.131.8d, 18.5.35d (~ 1.56.28d) *brahmabhūyāya gacchati* を参照。

(3) *brahmabhūyān bhaviṣyasi* 君はブラフマンとなる者 (?) になるだろう⁴¹⁾。

上に、b 句の読み⁴²⁾ として三つを選んで挙げた。読み (1) は、MBhār crit. ed. Poona 12.242.17ab 本文に見られる。下波線は、当該箇所を読みが校訂者により不確実と判断されたことを示す。読み (2)、(3) は ed. Poona 当該箇所への異読から回収される。刊本としては、読み (2) は ed. Kumbhakonam 12.256.17b に、読み (3) は ed. Calcutta 12.9054b, ed. KINJAWADEKAR 12.250 [77].17b (Nilakaṇṭha 注つき“Vulgate”)に見られる。

上記のうち、読み (2) *brahmabhūyaṃ bhaviṣyasi* を採った場合には、X-*bhūyam* √*bhū* 構文が考えられる (OERTEL 1926, pp. 66–68 には挙がらない)。人間である「君」と、事象である「ブラフマンとなること」とは、意味上、同一視できないからである。しかしそもそも、いずれの読みを本来的として採るべきかについて、確実な決定が難しい。

§ 2.3. 用例のまとめ

この X-*bhūyam* √*bhū* 構文は、ヴェーダ語による古期 Up. (BĀU がこれに該当する) 以降、少なくともはあるが在証される。確実な例は、[1] BĀU、[2] KauṣU ≈ ŚāṅkhĀ、[3] Śaṃkara ad BrahmaS に現れる。不確実な例は、[4] BĀU の他に、[5] MBhār に見られる。言語史上の意義を持つのは Upaniṣad の例 ([1] [2]) である。

この構文に一般に想定しうる意味としては、時代が新しい Śaṃkara ad BrahmaS ([3]) を除いては、概ね「X となるに至る」を設定できよう。KauṣU 3.2 = ŚāṅkhĀ 5.2 ([2]) では、X-*bhūyam* √*bhū* 構文と X-*bhūyam*

41) DEUSSEN 1906, p. 393 訳: “dann wirst du ein zu Brahman Gewordener sein”。AiG II-2, p. 461 § 278d は比較級でない *bhūyas-* として MBhār *brahmabhūyase*, *bhrahmabhūyān* (本箇所) を挙げ、これらを *brahmabhūya-* の変形であると理解する。

42) 他の異読を含めた詳細な情報については当該箇所の critical apparatus を、写本の情報については ed. Poona, vol. 15, pp. iii–vii を見よ。

√gam 構文が、互いに言い換えとして機能しており、両構文の意味差は、証明可能なほど大きくはない。

なお、現状発見し得た例は全て、確実なものも不確実なものも含め、哲学的教説の文脈にあるが、これが偶然かどうかは定かではない。

§3. 競合する構文：X-bhūyam √gam 構文

抽象名詞の acc. (目的地を示す acc.) に、移動を表わす動詞 e.g. √gam 「行く」⁴³⁾、√naś aśnu-^{te} 「到達する」⁴⁴⁾ etc. を組み合わせることにより、「～という状態に至る」という意味を表す構文がしばしばみられる (GAEDICKE 1880, p. 152; DELBRÜCK 1888, p. 167; FORSSMAN 1974, p. 55 § 5.3.; RENOU 1959, p. 38f. [= 1997, vol. 2, p. 668f.], § 32; p. 94 [= 1997, vol. 2, p. 724], n. 166 を参照)。その中で、X-bhūyam √gam 「～になることに至る」の例が、Vedic prose から在証される。以下に、OERTEL 1926, p. 67f.⁴⁵⁾ から、ヴェーダ文献よりの例を挙げる。

43) √gam 「行く」の caus. が用いられる例もある、e.g. JUB 3.30.2 *devatānām eva salokatām gamayati* 「(その者を) 他ならぬ神格たちと同じ世界を持つことへと至らしめることになる」。

44) E.g. AiB 1.13.11 *yaḥ śreṣṭhatām aśnute* 「最も繁栄している状態へと到達する者は…」。

45) OERTEL 1926, p. 67f. には挙げられないが、Veda 文献において X-bhūyam √gam 構文の可能性のある他の例として、BaudhŚS 24^{KarmāntaS}.3:187.3-5; 20^{DvaidhaS}.24:54.6 [ad 3.20: 162.9]; 24^{KarmāntaS}.33:220.9-10 の例が挙げられる。また、X-bhūyam ā√pad の例として、BaudhŚS^{KarmāntaS} 24.6-7: 190.4-8 が挙げられる。いずれも、祭式的文脈の詳細な検討を要する。Veda 文献より後における例として、MBhār *brahmabhūyaṃ* √gam (本論文 n. 40)、Kāś ad Aṣṭ 3.1.107 *brahmabhūyaṃ* √gam, *devabhūyaṃ* √gam (本論文 n. 4); Harṣac *devabhūyaṃ* √gam (pw s.v. *devabhūya-*) などを挙げうる。

§ 3.1 用例

[例 1] MS^p *vasīyobhūyam* √*gam*MS^p 1.4.10:58.19–59.2 (~ KS^p 32.7:26.9–12)⁴⁶⁾

ná māṣānām aśnīyād. ayajñiyā vai māṣā . ná tāsya sāyā^{[[58.20]]m aśnīyād}
yāsya prātār yakṣyamānaḥ syād. āpratijagdhena vai devā havyéna^{[[59.1]]}
*vasīyobhūyam*⁴⁷⁾ ágachan. prátijagdhenāsurāḥ pārābhavam̐s. tād
āpratijagdhena vā etā^{[[59.2]]d dhavyéna yājamāno} *vasīyobhūyam gáchati,*
pārāsyā bhrātṛvyo bhavati.

[新月満月祭における祭主の Upavasatha について:] (彼 [祭主] は) 豆たち⁴⁸⁾ を食べるべきではない。豆たちは、祭式に適さないのだ。それによって朝に (彼 [祭主] が) 祭式を行わんとしているようなそれを、(彼 [祭主] は) 夕に食べるべきでない。対応して食べられていない供物⁴⁹⁾ によって神々はより良くなることへと至り、対応して食べられた供物によってアスラたちは没落したのだ。それで、このように、対応して食べられていない供物によって祭主はより良くなることへと至り、当の者 (祭主) のライバルは没落するのだ。

ここでは、*vasīyobhūyam* √*gam* と、*pārā bhavati* (**parābhūya*- neut. は在証されない) とが、対比的に用いられている。MS^p の他箇所でも多く用いられる *vasīyān bhavati* 「(彼は) より良くなる」と、本個所の *vasīyobhūyam* √*gam* との間の意味差は証明できない。

46) 詳細については、AMANO 2009, p. 161f.; p. 162, n. 141 を参照。

47) Cf. AVŚ 16.9.4 (= AVP 18.53.1j) *vasyobhūya*-.

48) 部分の gen. である。

49) つまり、翌朝祭式に用いる供物で、それと同じものが前の晩に食べられていないものをいう (cf. AMANO 2009, p. 162, n. 140)。

[例2] MS^p *āvirbhūyaṃ* √*gam*⁵⁰⁾MS^p 1.8.6: p. 123, ll. 14–15⁵¹⁾

āvīr vāi nāmaīṣāhuti^[123.15]*s* | *āvirbhūyaṃ devamanuṣyeṣu gachati yā evaṃ veda.*

この献供は、*āvīṣ*「明瞭」という名なのだ。神々と人間たちとの間で明瞭になることへと至る、そのように知っている者は。

[例3] KauṣU ≈ ŚāṅkhĀ *ekabhūyaṃ* √*gam* が³、その後の *ekabhūyaṃ* √*bhū* と概ね等しい意味で用いられることについては、本論文 § 2.1. [例2] を参照。

[例4] AiU *ātmabhūyaṃ* √*gam*AiU 2.1.2 = AiĀ 2.5.2⁵²⁾

tat striyā ātmabhūyaṃ gacchati yathā svam aṅgaṃ tathā | *tasmād enāṃ na hinasti* | ... ||2||

[男性の精液が母胎に入って胎児となることについて:] それ（前出の *retas*- 精液）は、女性の自身となることへ至る、（女性）自身の身体部

50) 類似表現 AiĀ 2.3.2 *tasya ya ātmānam āvistarāṃ vedāśnute hāvirbhūyaḥ*「その者の自己をより明瞭に知っている者は、明瞭になることに(?)到達することになる」では、OERTEL 1926, p. 67f. が指摘するように、パラレル (cf. OERTEL 1926, p. 68) からは意味的に *āvirbhūyaṃ* と同じであることが想定される。この *hāvirbhūyaḥ* という読みは全ての edd. および注釈からも確証される。OERTEL 1926, p. 68 は、^{*}*hāvirbhūyaṃ* に訂正しようとするが、あるいは伝承自体は正しく、二次的で異例な変化 *X-bhūyaṃ* acc. >> *X-bhūyas* acc. (意味は同じ) がテキスト成立時に既に生じていた可能性は排除できない。なお、より後代の MBhār 12.231.18d, 12.234.8d *kalpate brahmabhūyase* (~ MBhār 6.36.26d; 6.40.53d; 12.154.25d; 12.208.19d; 12.243.7d; 13.128.31d; 13.130.33d; 13.131.56d; 14.47.8d *brahmabhūyāya kalpate*) でも、*X-bhūya*- >> *X-bhūyas*-が見られる。

なお、ChU 5.10.6 *tadbhūyaḥ* は別様に理解される (本論文 n. 39)。

51) 詳細については、AMANO 2009, p. 304; *ibid.* n. 961 を参照。

52) 詳細については、WINDISCH 1908, p. 61 を参照。

分であるように。それ故に、当の女性を（それは）傷つけない。

§ 3.2 用例のまとめ

X-*bhūyam* √*gam* 構文は、MS^p より見られ、Up. にまで継続する。この在証年代の中に、X-*bhūyam* √*bhū* 構文の確実な例の在証年代 (§ 2.3.) が収まる。以上の用例からは、X-*bhūyam* √*gam* と X-*bhūyam* √*bhū* との意味差、および X-*bhūyam* √*gam* と X √*bhū* との意味差は証明困難である。

§ 4. X-*bhūyam* √*bhū* 構文の文法的解釈

§ 4.1. この X-*bhūyam* √*bhū* 構文の文法的分析にまでは、OERTEL 1926 は踏み込んでいない。形態上は、X-*bhūyam* neut. は、nom.sg か acc.sg. かの二通りの可能性がある。もし nom.sg. neut. と仮定すると、主語と X-*bhūyam* 「X になること」が同一視されるという意味的矛盾が生じるため、acc.sg. neut. である可能性が高くなる。この構文は、上に示したように、概ね「X になるに至る」を意味する。ここで、X-*bhūyam* acc.sg. neut. は、文脈上 √*bhū* 「なる」の意味内容を、即ち、どういう状態になる (√*bhū*) かを、補足しているといえる。

§ 4.2. この X-*bhūyam* √*bhū* 構文は、*idám* √*as* / √*bhū* 構文 (HOFFMANN 1976a; GOTÖ 2008) と分析しうる、ということを以下で論じていく。*idám* √*as* / √*bhū* 構文は、MS^p 3.3.7: p. 40, l. 7f. *sá rāṣṭrām ábhavat* 「彼は王権を得た」; Yt 5.22, 26, 46, 50 (YAv.) *yaθa azəm upəməm xšaθrəm bauuāni* 「私が最上の支配権を得るように」などの例のように、単なるコピュラ文と解せない (例えば、前者の例は、*「彼は王権となった」を意味しない) ところに特徴がある。

動詞としては、後藤 2007, p. 222; GOTÖ 2008, p. 121 が指摘するように、

√bhū / √as の suppletion (cf. GOTÔ 1990, p. 1006f. [文献付き]⁵³⁾) により、√bhū に並んで √as (表示されない場合もある) も用いられる。そのため、KauṣU 3.2 ≈ ŚāṅkhĀ 5.2 ed. ĀPĀṬE *Up. Samuccaya*, Ānandāśrama 1925, 本文, p. 119 の、bhūtva を欠く読み *ekabhūyam vai prāṇāḥ ...* (本論文 §4.2.) も、背景に √as があるものと考えられるから、*idām √as / √bhū* 構文から排除されない。

§4.2.1. 在証年代について。*idām √as / √bhū* 構文は YAv. と OIA に在証されるため、少なくとも IIR. に遡る構文である (HOFFMANN 1976a; GOTÔ 2008, pp. 118–120)⁵⁴⁾。OIA では、ṚV の言語段階においても当然、この構文は存在していたものと推知され、実際に、可能性のある ṚV の例が幾つか指摘されている⁵⁵⁾。確実な例は AV から Up. まで広く見られ、特に散文の用例が多く

53) 更に、本論文 n. 56 (・*rūpām* の項、ŚBM 10.4.1.5, 8 について) を参照。

54) 副詞的に用いられる *nāma* (acc.sg.) 「名前についていえば」を用いた構文を勘案するなら、PIE に遡る可能性も排除できなくなる (GOTÔ 2008, p. 118, n. 14)。なお、WEISS 2017, pp. 797–799 は、“inner PIE”にも *idām √as / √bhū* 構文の存在を推測するが、GOTÔ 2008, p. 120f. による *Inhaltsakkusativ* 説 (本論文 §4.2.2. を参照) は考慮されていない。

55) ṚV の例は、散文の例より解釈が不確実になるという問題がある。可能性のある例については、GOTÔ 2008, p. 121, n. 22 (ṚV 10.90.2a)、GOTÔ in GOTÔ / DŌYAMA 2022, p. 469, note ad ṚV 7.15.1 (ṚV 1.109.7d; 1.164.37a; 1.185.1c; 6.62.8ab; 7.15.1c; 7.21.8c) を参照。更に、確定はできないものの、候補として挙げるのは、次の 5 例である：[1] ṚV *māyas* (堂山 2005, p. 284, n. 555; 特に、主語である関係代名詞が述語の性に一致する現象が起こっていない ṚV 1.176.4b *yó ... māyah* を参照)；[2] ṚV 8.97.7c ... *t_uvám ín na āpyam* 「お前は我々との友人関係を持っている」(acc. をとる動詞が省略されているのでなければ)；[3] RV 7.83.1a *yuvām narā páśyamānāsa āpyam* 「君たち二人 (インドラとヴァルナ) を、男たち二人よ、友人関係を持っている者として、(彼らは) 見つづ」(もし「君たち二人を、... 友人関係を見つづ」でなければ)；[4] ṚV 5.11.6c *sá jāyase mathyāmānāḥ sāho mahát* 「そのような者として君 (アグニ) は生まれる、(木から) 鑽り出されつづ、大きな力を持った状態で」(もし「... 大きな力として」[tr. GELDNER] / 「... (君の) 力は大きい」等でなければ)；[5] ṚV 10.10.11a *yád anāthām bhāvāti* 「庇護者がいない状態に (人が) なるならば」(もし「庇護者がいない状態が生じるならば」でなければ)。

知られている (HOFFMANN 1976a; GOTÔ 2008, pp. 117–120 に挙がる諸用例を見よ)⁵⁶⁾。更に、GOTÔ 2008, p. 120, n. 21によれば、Ep. Skt.⁵⁷⁾、Cl. Skt. におい

56) GOTÔ 2008, p. 118 に挙がる例へ、以下の例や参考文献を増補・追加できる (本論文本文で扱った諸例を除く。RV の例については本論文 n. 55 を、neut. pl. を用いた例については、本論文 n. 59 を見よ)：

- ・ *mitrām* √*as* / √*bhū*「同盟に属するようになる」の用例は、都築 2022; 都築 2024 で増補され、議論されている。
- ・ *idāṁ sārvaṁ*「ここの全て」の例の可能性として、ŚBM 5.1.1.8 ~ ŚBK 6.1.1.6 を追加しうる (池田 2007, p. 52; p. 61f., n. 6)。
- ・ *rāṣṭrām*「王権」のみの例は、MS^p 3.3.7 [p. 40, ll. 7, 8] ≈ KS^p 21.10 [p. 50, ll. 2, 3] ≈ TB^p 1.7.7.4; TS^p 3.4.8.1; ŚBM 3.1.6.3; AiB 5.30.15 (GOTÔ 1996, p. 111) など。*rāṣṭrām*「王権」と *ārāṣṭram*「非王権」とが並んで用いられる例は、ŚBM 9.4.1.5; 13.4.2.17 (RAU 1957, p. 68); PB 21.12.2 (RAU 1957, p. 69)。
- ・ *rūpām*「姿形」BĀUM 1.5.32 [= ŚBM 14.4.3.32] ≈ BĀUK 1.5.31 [= ŚBK 17.1.5.31]; ŚBM 10.4.1.5 *ēkaṁ rūpām ubhāv asāva_ / abhavatām*; 8 / ... *āu bhavatas*「一つの姿を、我々両者はとろう／彼ら両者はとった／とる」(pres. ind. √*bhū* と pres. subj. √*as* の suppletion, e.g. TB^p 3.3.4.6 *asad, bhavati*); TB^p 3.3.4.5 *rūpāny āste* (もし直前の *bībhṛati* の目的語でなければ)。更に、*rūpām* が関係の acc. の機能を持つ (「姿かたちに関していえば」とされる例 (MINARD 1956, p. 271f. § 757) も関連する可能性がある。
- ・ *vivācanam*「評決」: TB^m 2.7.16.4; AVP online ed. HELLWIG / LEACH / ZEHNDER 12.5.10b; AiB 7.18.6 [Śunaḥśepa] Gāthā 28 (*sadvivācanam / sad vivācanam*); *vivacanam* JB 1.271。以上の諸例を online ed. HELLWIG / LEACH / ZEHNDER, comm. ad AVP 12.5.10b は指摘するが、別解釈 (「権威」への意味変化) を示す。AiB 7.18.6 Gāthā 28 およびそれに対応する ŚāṅkhŚS の読みについて、後藤 2019, p. 69, n. 130 を参照。
- ・ *yāśas*「名声」: ŚBM 1.6.3.15 (~ ŚBK 5.5.4.2–8); 2.2.3.1; 4.6.9.1; 14.1.1.3; PB 11.3.9; 13.9.23; 15.3.32 (*bhargas* に並んで)。そのうち ŚBM 1.6.3.15 (~ ŚBK 5.5.4.2–8); 4.6.9.1; 14.1.1.3 では、*śrīyaṁ* √*gam*「繁栄に到達する」と並んで登場する。
- ・ *bhargas*「威光」: PB 15.3.32 (*yāśas* に並んで。~ PB 19.8.4)。Cf. AVŚ 9.1.4d (≈ AVP 16.32.4d) *bhārgas carati* (?)。
- ・ *mahāt*「偉大さ」: ŚBM 5.2.1.18 *mahād ... ayām abhūd*「この者は偉大さを (今や) 得たぞ」(~ ŚBK 6.1.1.6 *mahād ... ayām prāpad*「この者は偉大さに (今や) 到達したぞ」)、cf. 池田 2007, p. 62, n. 6。
- ・ *priyaṁ babbhūva*「一員たる資格を得た」VādhAnv Purūravas-Urvaśī “ § 4 ”の参考文献 (増補) として、GOTÔ 2000, p. 86f.; 後藤 2004, pp. 848, 860f.; GOTÔ 2008, p. 119; *ibid.*, n. 18; 後藤 2011, p. 520; *ibid.*, n. 17 が挙げられる。

57) 更に、MBhār 5.1.14cd *mahīpatitvaṁ ... bubhūset*「(ユディシユティラは) 王たる地

てすら、可能性のある例が皆無ではない。*idám* が対格に対する補語になっている可能性のある例も指摘されている⁵⁸⁾。以上は、当然、本論文で扱った *X-bhúyam* $\sqrt{bhū}$ の用例の在証年代と矛盾しない。

§ 4.2.2. *idám* に当たる語の性・格について。*idám* に当たる語は中性——単数が殆ど⁵⁹⁾——しか今まで (HOFFMANN 1976a; GOTÔ 2008) 知られていない。この *X-bhúyam* タイプの複合語も確かに中性単数であるため、当てはまる。

idám $\sqrt{as}$ / $\sqrt{bhū}$ 構文の *idám* に当たる語を、HOFFMANN 1976a は nom. と考えた。一方、後藤 2007, p. 222; GOTÔ 2008, p. 121f. は、述語的副詞あるいは

位を持つととするであろう」(cf. PW s.v. *bhū desid.* 3)–4)) もここに属する可能性がある。

58) *idám* に当たる語が対格に対する補語になっているという解釈も不可能ではないと思われる例としては、後藤 2007, p. 224, n. 16; GOTÔ 2008, p. 122, n. 24; 都築 2024, p. 3 § 4. が挙げる *idám* $\sqrt{kar}$ 構文である可能性のある例の他に、以下二例を挙げる：[1] RV 7.83.1a では、*ápyam* は文の主語への補語か、或いは、*yuvām* acc. への補語である可能性もある (本論文 n. 55 を参照)。[2] AVP 1.65.1ab ed. ZEHNDER et al. *†ghrtāhutā prthivī mā na eno | asmān †prajāṁ vocata kilbiṣāṇi* | 「グリタを注がれている大地は、我々を、罪を持っていると [いう] なかれ。我々を、(我々の) 子孫を、罪たちを持っているという [なかれ]」(もし「... 我々に罪を [言う] なかれ。我々に、(我々の) 子孫に、罪たちを言う [なかれ]」でなければ) も候補となる。*kilbiṣam* を用いた *idám* $\sqrt{as}$ / $\sqrt{bhū}$ 構文は、AiB 1.13.12 *sa kilbiṣam bhavati* 「その者は罪を得る」に明確に在証される (GOTÔ 2008, p. 118)。

59) *apāmītya*- neut. 「借り」 (< *āpa maya*-^{te}, cf. GOTÔ 1987, p. 240f.; MBhāṣ, Kāś ad Aṣṭ 3.4.19) を用いた AVŚ 6.117.1a (= AVP 16.49.10a) *apāmītyam āpratittam yād āsmi* 「私が負っているまだ返済されていない借り」は、GOTÔ 1987, p. 241, n. 528; GOTÔ 2008, p. 119 において指摘される通り、*idám* $\sqrt{as}$ / $\sqrt{bhū}$ 構文である。意味の観点からは、*ṛṇām* (GOTÔ 2008, p. 119; *ibid.*, nn. 15, 16) と比較のこと。パラレル TB^m 3.7.9.8d *yāny apāmītyāny āprati(t)tāny āsmi* も同じく *idám* $\sqrt{bhū}$ 構文であるが、pl. になっている点で異なる。neut. pl. を用いた *idám* $\sqrt{as}$ / $\sqrt{bhū}$ 構文の例は、他にも少数が存在する：GOTÔ 1999, p. 137f. § 2.12; GOTÔ 2008, p. 120; *ibid.*, n. 20 (そこに挙がる例への増補：MS^p 1.8.6 [p. 124, ll. 14–15]; 2.2.8 [22.1–2]; 2.2.9 [23.4–5] *etāni sārvaṇi*; ChU 5.1.15, 7.15.4 *prāṇo hy evaitāni sarvaṇi bhavati*)。

関与の acc. の可能性も排除されないとしつつも、主として、存在を表す動詞 √*as* / √*bhū* の意味内容を具体的に補足する *Inhaltsakkusativ* / accusative of content 「内容の対格」⁶⁰⁾ である、とする分析を提案する。この分析は、主語と *idám* に当たる語を同一視できないという意味的観点からも、また動詞 √*as* / √*bhū* が述語名詞の数に一致するという現象、および主語となる代名詞の性数が述語名詞の性数に一致する現象の欠如（詳細は本論文 § 4.2.4. 参照）を説明できる点からも、より説得力があると思われる⁶¹⁾。

§ 4.2.3. *idám* に当たる語の種類について。*idám* に当たる語には、社会制度に関する語彙が多い傾向にある（後藤 2007, p. 221; GOTÔ 2008, pp. 118–120）が、社会制度に関わるとは必ずしも言い切れない語彙（e.g. *rūpám* 「姿形」, cf. GOTÔ 2008, p. 119f., 本論文 n. 56）も含まれる。GOTÔ 2008, pp. 118–120 に挙がる諸例には、X-*bhūya-* が属する *brahmódyā-* タイプの複合語（§ 1. を参照）は見当たらないが、このタイプに属する複合語 *pāpāvahīya-*⁶²⁾ 「悪しきことを離れ去ること」を用いた *idám* √*as* / √*bhū* 構文の例として、以下を挙げることができる：

TS^p 7.3.1.1 （サットラ）⁶³⁾

pāpāvahīyaṃ vā eténa bhavanti yád daśamám áhar

悪しきことを離れ去った状態に（彼らは）なるのだ、第十番目の日というのによって。／悪しきことを離れ去った状態で（彼らは）繁栄するの

60) これについては特に GOTÔ 2002, pp. 32–35（文献付き）を参照。

61) AMANO 2009, pp. 39–43, § 2.1.5. にも、*idám* √*as* / √*bhū* 構文の文法的解釈についての議論がある。都築 2022, pp. 33–35 には解釈史のまとめがある。文法学者 Bhartṛhari による分析については、KAWAMURA 2019 を参照。

62) RENOU 1935, p. 371, n. 2 を参照。PW, pw s.v. *pāpāvahīya-* は“adv.”とする。もし *namul-gerund* ならば、通常は **pāpāvahīyam* が期待されよう（WHITNEY 1889, p. 359f. § 995; TIKKANEN 1987, p. 76; GOTÔ 2013, p. 143f.）。

63) 本箇所文脈については、廣瀬 2024, p. 173f. を参照。

だ [...]。

§ 4.2.4. *idám √as / √bhū* 構文を概ね示唆する判断基準としては、一般に、

① 動詞 *√as / √bhū* の数が述語名詞の数に一致する、という原則⁶⁴⁾ (Gotō 1999, pp. 132–138 § 2⁶⁵⁾) に従わない (後藤 2007, p. 222; p. 224, n. 17; Gotō 2008, p. 122; *ibid.*, n. 25)。

② 代名詞が主語となる場合、その性数が述語名詞の性数に一致する、という原則⁶⁴⁾ (DELBRÜCK 1888, p. 90 § 54; p. 565 § 279.1; Gotō 1999, pp. 132–138 § 2; 後藤 2017, p. 54f.; *ibid.* n. 27 [文献付き]) に従わない。

③ 文脈上「～になる」の意味を持つと解せない。

ということが挙げられよう。本論文で扱った例 (§ 2.1. [例 1] BĀUM 5.13.1, 2 ~ BĀUK 5.12.1) ; [例 2] KauṣU 3.2 ≈ ŚāṅkhĀ 5.2) は、上記③に当て嵌まる。

§ 4.2.5. *idám √as / √bhū* 構文の意味として、一般的に、「～を管轄・支配している」 (後藤 2007, p. 221; Gotō 2008, p. 117f.) など进行想定しうが、個々の用例によって差がある (例えば、後藤 2007, p. 222 の訳文「～を持っている」など)。X-*bhūyam √bhū* 「X になるに至る」の場合、X-*bhūyam* acc.sg. neut. は、動詞 *√bhū* を意味的に補足している。そこで、上記 (§ 4.2.2.) に挙げた後藤による *Inhaltsakkusativ* とする解釈を考慮して、「X になること

64) ①②への例外としては、Gotō 1999, p. 135f. § 2.5–8 に挙がるものの他に、本論文 n. 27 (*ékam √bhū*) を参照。更に、②への例外としては、RV 6.41.3cd *etám piba ... yás te ánnam* 「これ (*sóma*- m.) を君は飲め、[...] 君の食物であるところの」および AiB 3.33.1 (本論文 n. 65) を挙げうる。

65) ①の例として、他に、AiB 3.26.3 (西村 2006, p. 100) ; AiB 3.33.1 *tāḥ sambhṛtā eṣa devo 'bhavat* 「それら (f.pl.; 前文の *teṣām yā eva ghoratamās tanva āsaṃs* 「彼ら [神々] の他ならぬ最も恐ろしい身体たちであったもの」を指す) は、集め合わされると、例の神 (ルドラ) となった」; MBhāṣ Paspasā 10.2, ed. KIELHORN / ABHYANKAR vol. 1, p. 7, l. 16f. (KIEHNLE 1979, p. 45) など を挙げうる。

(X-*bhūya*-) によって特徴づけられるような状態に、なる (√*bhū*)」⁶⁶⁾ という意味から出発することが可能であると思われる。

また、*brahmacāryam* √*car*ⁱ「梵行⁶⁷⁾を行う」(DELBRÜCK 1888, p. 170; FORSSMAN 1974, p. 56; GOTÔ 2002, p. 34 § 9.2.; GOTÔ 2008, p. 116) ; *bhikṣācāryam* √*car*ⁱ「乞食行を行う」⁶⁸⁾ (BÄUM 3.4.1 [= ŚBM 14.6.4.1] ; BÄUM 4.4.26 [= ŚBM 14.7.2.26] ; cf. FORSSMAN 1974, p. 56) ; *stricāryam* √*car*ⁱ「女性と性的関係を持つ(?)」⁶⁹⁾ (JB 2.235; cf. FORSSMAN 1974, p. 56) など⁷⁰⁾と同様の、同じ動詞語根由来の語を「支え」として後肢に持つ複合語を同族目的語として用いるタイプ⁷¹⁾の Inhaltsakkusativ と理解することも可能と思われる。

§ 5. 結論

X-*bhūyam* √*bhū* 構文の諸用例の再検討 (§ 2.) により、この構文の確かかと言語史的に意味を持つ用例は BÄUM 5.13.1, 2 ~ BÄUK 5.12.1 と KauṣU 3.2 ~

66) Cf. 後藤 2007, p. 222; GOTÔ 2008, p. 121f.

67) Cf. 梶原 2021, passim.

68) 更に、*bhaikṣācāryam* √*car*ⁱ「乞食行を行う」BaudhGS 2.5.45 (梶原 2021, p. 183; ~ *bhikṣācāryam* √*car*ⁱ BhārGS 3.4; ĀpMP 2.6.14 [ad ĀpGS 4.11.25]; HirGS 1.7.12) もここに属する。これらに対して、*bhikṣām* √*car*ⁱ (BaudhDhS 1 [.2].4.7; ManuSmṛ 6.56) ; *bhaikṣam* √*car*ⁱ (PW s.v. *bhaikṣā*- 2) a)「乞食を行う」という表現をも参照。

69) 複合語 *strī-cārya*- の背景には、「人 (instr. / acc.) + √*car*ⁱ『~と性的関係を持つ』」(OERTEL 1942, p. 140f. [= *Kleine Schriften* vol. 1, p. 513f.], § 8 (b) – (c)) という構文を想定しうるかもしれない。一方、CALAND 1919, p. 184f. は、「女のように振る舞う」の意味に解している。

70) *brahmōdyam* √*vad*ⁱ「ブラフマンの議論 (ブラフマンを議論すること) を議論する」の例 (e.g. ŚBM 4.6.9.20; 13.5.2.11 *brahmōdyam vadanti*; 13.5.2.23 *uditē brahmōdye*; KauṣS 5.2 [38].25 *brahmodyam vadiṣyan*; 更に TB^m 1.2.1.6 *brahmavādām* √*vad*ⁱ [西村 2006, p. 103]) をも参照。

71) 支えとなる同族語を後肢に持つ複合語を目的語として用いるタイプの Inhaltsakkusativ の例については、GOTÔ 2002, p. 33 § 9.1.; p. 33, n. 21; 堂山 2004, p. 65 n. 11; KULIKOV 2017, p. 379 を参照。

ŚāṅkhĀ 5.2であるといえる。Śaṃkara ad BrahmaS 4.1.6も確実な例であるが、年代がかなり新しく、意味も幾分異なっている。BĀUM 5.6.2 (~ BĀUK 5.5.1)は解釈の点で、MBhār Poona crit. ed. 12.242.17ab var. lec. は読みの点で不確実である (§ 2.3.)。

構文自体の意味は、BĀUM 5.13.1, 2 ~ BĀUK 5.12.1 と KauṣU 3.2 ≈ ŚāṅkhĀ 5.2において、概ね「Xになるに至る」である (§ 2.3.)。単なる X √bhū 「Xになる」および X-bhūyam √gam 「Xになるに至る」(MS^p+) という構文とは、何らかの意味・用法上の違いがあった可能性が当然考えられるものの、違いを明確に証明するのは難しい (§ 2.3.; § 3.2.)。特に、KauṣU 3.2 ≈ ŚāṅkhĀ 5.2では、X-bhūyam √bhū 構文と X-bhūyam √gam が、互いに言い換えとして機能していることは、両構文の意味・用法が、相当程度近接していることを示す (§ 2.1.)。

文法的分析—— OERTEL 1926, p. 67f. によつては行われていない——は、以下の通りである (§ 4.): X-bhūyam は動詞 √bhū の意味内容を具体的に補足するものであることから、内容の対格 (Inhaltsakkusativ) 構文、或いは特に、その一種であると解される *idām* √as / √bhū 構文であると分析できる。意味的には、『「Xになること (X-bhūya-)」によって特徴づけられるような状態に、なる (√bhū)」に遡ると考えられる。一方、X-bhūyam (acc.) は、X-bhūyam √gam 構文においては目的地の対格 (§ 3. 冒頭)、という異なる機能を担っていることに注意を要する。

[略号表]

acc.	= accusative
adj.	= adjective
adv.	= adverb
AiĀ	= Aitareya-Āraṇyaka
AiB	= Aitareya-Brāhmaṇa
AiG	= <i>Altindische Grammatik</i> (WACKERNAGEL 1896, 1905; DEBRUNNER 1954)
AiU	= Aitareya-Upaniṣad

ĀpGS	= Āpastamba-GṛhyaSūtra
ĀpMP	= Āpastamba-MantraPāṭha
Aṣṭ	= Aṣṭādhyāyī
AV	= Atharvaveda
AVP	= Atharvaveda (Paippalāda)
AVŚ	= Atharvaveda (Śaunaka)
ĀpGS	= Āpastamba-GṛhyaSūtra
BaudhDhS	= Baudhāyana-DharmaSūtra
BaudhGS	= Baudhāyana-GṛhyaSūtra
BaudhŚS	= Baudhāyana-ŚrautaSūtra
BĀU	= Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad
BĀUK	= Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (Kāṇva)
BĀUM	= Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (Mādhyandina)
BhārGS	= Bhāradvāja-GṛhyaSūtra
BrahmaS	= BrahmaSūtra
caus.	= causative
ChU	= Chāndogya-Upaniṣad
Cl. Skt.	= Classical Sanskrit
Divy	= Divyāvadāna
DvaidhaS	= DvaidhaSūtra (= BaudhŚS 20–23)
Ep. Skt.	= Epic Sanskrit
fem.	= feminine
gen.	= genitive
GopB	= Gopatha-Brāhmaṇa
Harṣac	= Harṣacarita
HirGS	= Hiranyakeśi-GṛhyaSūtra
ind.	= indicative
instr.	= instrumental
JB	= Jaiminiya-Brāhmaṇa
JUB	= Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa
KarmāntaS	= KarmāntaSūtra (= BaudhŚS 24–26)
Kāś	= Kāśikā
KauṣU	= Kauṣītaki-Upaniṣad
KS	= Kāthaka-Saṃhitā
□ ^m	= mantra 部分に属する
ManuSmṛ	= ManuSmṛti

masc.	= masculine
MBhār	= MahāBhārata
MBhāṣ	= MahāBhāṣya
MIA	= Middle Indo-Aryan
MS	= Maitrāyaṇī Saṃhitā
neut.	= neuter
Nir	= Nirukta
nom.	= nominative
□ ^p	= prose (散文) 部分に属する
PB	= Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa
pl.	= plural
pr.	= present
PW	= “Petersburger Wörterbuch (großes)” (BÖHTLINGK / ROTH 1855–1875)
pw	= “Petersburger Wörterbuch (kleines)” (BÖHTLINGK 1879–1889)
Rām	= Rāmāyaṇa
ṚV	= Ṛgveda
ŚāṅkhĀ	= Śāṅkhāyana-Āraṇyaka
ŚāṅkhB	= Śāṅkhāyana-Brāhmaṇa
ŚāṅkhŚS	= Śāṅkhāyana-ŚrautaSūtra
ŚBK	= Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva)
ŚBM	= Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina)
sg.	= singular
subj.	= subjunctive
TĀ	= Taittirīya-Āraṇyaka
TB	= Taittirīya-Brāhmaṇa
TS	= Taittirīya-Saṃhitā
TU	= Taittirīya-Upaniṣad
Up.	= Upaniṣad
VS	= Vājasaneyi-Saṃhitā
VSK	= Vājasaneyi-Saṃhitā (Kāṇva)
VSM	= Vājasaneyi-Saṃhitā (Mādhyandina)
VSM	= Vājasaneyi-Saṃhitā (Mādhyandina)
YAv.	= Young Avestan
Yt	= Yašt

[本論文で言及したシンタクス事項(選)]

idám √*as* / √*bhū* : § 4.; nn. 54–59.

ékam √*as* / √*bhū* : n. 27.

éka-eka- (Āmreḍita) / *ékaika-* の一致 : n. 24.

X-cáryam √*car*¹ : § 4.2.5.

X-bhūyam √*bhū* : § § 1.–2.; § 4.

X-bhūyam √*gam* : § 3.

√*as* / √*bhū* の suppletion : § 4.2.; n. 53; n. 56 (・*rūpám* の項目).

対格、内容の / *Inhaltsakkusativ* / accusative of content : § 4.2.2., 5.; n. 71.

対格、目的地の : § 3.冒頭.

動詞の数が述語名詞の数に一致 : § 4.2.2., 4.; nn. 27, 64, 65.

主語となる代名詞の性・数が述語名詞の性・数に一致 : § 4.2.2., 4.; nn. 27, 64.

[一次文献]

一次文献の書誌情報については、日本印度学仏教学会による「ヴェーダ文献学関係略語および書誌一覧 2018 年 8 月 27 日版」(<https://drive.google.com/file/d/1elvoz6GjOXmcxm8IJgOsE7fCdstRtgm3/view>) を参照。加えて、AVP 12 巻 online ed. (<https://www.atharvaveda-online.uzh.ch/edition/12>) を参照した。最終アクセス日は、共に、日本時間 2025 年 9 月 18 日正午であった。

[二次文献]

AMANO Kyoko (天野 恭子)

[2009] *Maitrāyaṇī Samhitā I–II. Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Bremen: Hempen Verlag.

BODEWITZ, Henk

[2002] *Kauṣītaki Upaniṣad. Translation and Commentary with an Appendix Śāṅkhāyana Āraṇyaka IX–XI*. Groningen: Egbert Forsten.

BÖHTLINGK, Otto

[1879–1889] *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung*. I–VII. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften. [pw]

BÖHTLINGK, Otto / ROTH, Rudolph

[1855–1875] *Sanskrit-Wörterbuch*, I–VII. St. Petersburg. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften. [PW]

CALAND, W.

- [1919] *Das Jaiminiya-Brāhmaṇa in Auswahl. Text, Übersetzung, Indices.* Amsterdam: Johannes Müller.

DEBRUNNER, Albert

- [1954] *Altindische Grammatik.* Band II, 2. Die Nominalsuffixe. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

DEEG, Max

- [1995] *Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yāska's und seiner Vorgänger.* Dettelbach: Verlag J.H. Röhl.

DELBRÜCK, B.

- [1888] *Altindische Syntax.* Syntaktische Forschungen V. Halle : Waisenhauses.

DEUSSEN, Paul

- [1897] *Sechzig Upanishad's des Veda aus dem Sanskrit übersetzt und mit Einleitungen und Anmerkungen versehen.* Leipzig: F. A. Brockhaus.
- [1906] *Vier philosophische Texte des Mahābhārata: Sanatsujāta-Parvan — Bhagavadgītā Mokṣadharmā — Anugītā.* In Gemeinschaft mit Otto Strauss aus dem Sanskrit übersetzt. Leipzig: F. A. Brockhaus.

EDGERTON, Franklin

- [1965] *The Beginnings of Indian Philosophy. Selections from the Rig Veda, Atharva Veda, Upaniṣads, and Mahābhārata. Translated from the Sanskrit with an Introduction, Notes, and Glossarial Index.* London: George Allen & Unwin.

FORSSMAN, Bernhard

- [1974] “Zu homerisch ἄγγελος «Bote».” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 32, pp. 41–64.

GAEDICKE, Carl.

- [1880] *Der Accusativ im Veda.* Breslau: Wilhelm Koebner.

GOTŌ Toshifumi (後藤 敏文)

- [1987] *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia.* (2., überarbeitete und ergänzte Auflage 1996) Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- [1990] “Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1. *amⁱ*, 2. *ay/i*, 3. *as/s*.” *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 15(4), 大阪, pp. 987–1012.
- [1996] “Zur Geschichte vom König Jānaśruti Pautrāyaṇa (Chāndogya-Upaniṣad IV 1-3)” *Studien zur Indologie und Iranistik* 20. Festschrift Paul Thieme zum 90. Geburtstag: pp. 89–115.
- [1999] “Notizen zur altindischen und avestischen Syntax ” pp. 127–142 of.

- Compositiones Indogermanicae: in memoriam Jochem Schindler*. Hrsg. von H. Eichner und H.C. Luschützky unter redaktioneller Mitwirkung von V. Sadoski. Enigma Corporation : Praha.
- [2000] “Purūravas und Urvaṣī.” aus dem neuentdeckten Vādhūla–Anvākyāna (ed. IKARI). In: *Anusantatyai*. Fs. Narten (MSS Beiheft), pp. 79–110.
- [2002] “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums – anhand des Altindoiranischen – ” *Indogermanische Syntax — Fragen und Perspektiven* Wiesbaden : Reichert Verlag. pp. 21–42.
- [2008] “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: śālām as im Śatapatha-Brāhmaṇa.” *Indologica. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume*, Book 1, Moscow. pp. 115–125.
- [2013] *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*. Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- GOTŌ Toshifumi / DŌYAMA Eijirō (後藤 敏文 / 堂山 英次郎)
- [2022] *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Sechster und siebter Liederkreis. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Eijirō Dōyama (Buch VI.1–52) und Toshifumi Gotō (Buch VI.53–75 und Buch VII)*. Berlin: Verlag der Weltreligionen.
- HARIMOTO, Kengo (張本 研吾)
- [2006] “The Date of Śāṅkara: Between the Cālukyas and the Rāṣṭrakūṭas.” *Journal of Indological Studies* 18, pp. 85–111.
- HOFFMANN, Karl
- [1967] *Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung*. Heidelberg : Carl Winter.
- [1976a] “Ved. *idām bhū*.” In: HOFFMANN 1976b, pp. 557–559.
- [1976b] NARTEN, Johanna. (ed.), *Aufsätze zur Indoiranistik*. Band 2. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- JAMISON, Stephanie W.
- [1986] “Brāhmaṇa syllable counting, Vedic *tvác* ‘skin’, and the Sanskrit expression for the canonical creature.” *Indo-Iranian Journal* 29(3), pp. 161–181.
- KAJIHARA Mieko (梶原 三恵子)
- [2011] “The “*grhya*” Formulas in Paippalāda-Saṃhitā 20 ” *ZINBUN. Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 42, pp. 39–62.
- KAWAMURA Yūto (川村 悠人)
- [2019] “The Vedic *Idām Bhū*-Construction as a Precursor of the Compound Type X-*Bhūta* ” In: Heleen DE JONCKHEERE, Marie-Hélène GORISSE, Agnieszka

ROSTALSKA (edd.). *Puṣpikā V: Tracing Ancient India, through Texts and Traditions: Contributions to Current Research in Indology*. Oxford & Philadelphia : Oxbow Books, pp. 129–141.

KIEHNLE, Catharina

[1979] *Vedisch ukṣ und ukṣ/vakṣ. Wortgeschichtliche und exegetische Untersuchungen*. Wiesbaden: Franz Steiner.

KULIKOV, Leonid

[2017] “ 28. The syntax of Indic ” In: *Handbook of Comparative and Historical Indo-European Linguistics*, vol. 1. Berlin / Boston: De Gruyter Mouton, pp. 377–409.

MACDONELL, Arthur Anthony / Arthur Berriedale KEITH

[1912] *Vedic Index of Names and Subjects*. 2 vols. London: John Murray.

MINARD, Armand

[1956] *Trois énigmes sur les cent chemins. Recherches sur le Śatapatha-Brāhmaṇa*. Tome II. Paris: E. de Boccard.

OERTEL, Hans

[1926] *The Syntax of Cases in the Narrative and Descriptive Prose of Brāhmaṇas*. Heidelberg: Carl Winter.

[1942] “ Zu den ai. Ellipsen. ” *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* 67, pp. 129–153 [= *Kleine Schriften* vol. 1, pp. 502–526].

[1994] *Kleine Schriften*. 2 vols. Stuttgart: Franz Steiner.

OLDENBERG, Hermann

[1888] *Die Hymnen des Rigveda. Herausgegeben von Hermann Oldenberg. Band I. Metrische und textgeschichtliche Prolegomena zu einer kritischen Rigveda-Ausgabe*. Berlin: Hertz.

[1909] *Ṛgveda. Textkritische und exegetische Noten. Erstes bis sechstes Buch*. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.

RAU, Wilhelm

[1957] *Staat und Gesellschaft im alten Indien: nach den Brāhmaṇa-Texten dargestellt*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

RENOU, Louis

[1935] “ L’absolutive sanskrit en -am. ” *Mémoires de la Société de linguistique de Paris* 23, pp. 359–438.

[1959] “ Sur la structure du kāvya. ” *Journal Asiatique*, Paris, 1959, pp. 1–114 [= 1997, Tome II, pp. 631–744]

[1997] *Louis Renou. Choix d’études indiennes*, Tome I, II. Paris : Presses de l’École

française d'Extrême-Orient.

SHARMA, Aryendra

[1959–1960] *Beiträge zur vedischen Lexikographie: Neue Wörter in M. Bloomfields Vedic Concordance*. PHMA Heft 5/6. München: J. Kitzinger.

TIKKANEN, Bertil

[1987] *The Sanskrit Gerund: A Synchronic, Diachronic and Typological Analysis*. Studia Orientalia, Vol. 62. Helsinki.

WACKERNAGEL, Jakob

[1896] *Altindische Grammatik*. Bd. I. Lautlehre. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

[1905] *Altindische Grammatik*. Bd. II, 1 *Einleitung zur Wortlehre, Nominalkomposition*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

WEISS, Michael

[2017] “King. Some observations on an East–West archaism.” In: Bjarne Simmelkjær Sandgaard HANSEN, Adam HYLLESTED, Anders Richardt JØRGENSEN, Guus KROONEN, Jenny Helena LARSSON, Benedicte Nielsen WHITEHEAD, Thomas OLANDER, and Tobias Mosbæk SØBORG (eds.), *Usque ad Radices: Indo-European Studies in Honour of Birgit Anette Olsen*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press, pp. 793–800.

WHITNEY, William Dwight

[1889] *Sanskrit Grammar, Including Both the Classical Language, and the Older Dialects of Veda and Brāhmaṇa*. 2nd ed. Cambridge (Mass.): Harvard University Press.

WINDISCH, Ernst

[1908] *Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*. Leipzig: B.G. Teubner.

WITZEL, Michael

[1989] “Tracing the Vedic dialects.” In: Colette CAILLAT (ed.), *Dialects dans les littératures indo-aryennes*. Paris: Collège de France, Institut de Civilisation Indienne, pp. 97–264.

池田 宣幸

[2007] 「Śatapatha-Brāhmaṇa の Vajapeya に関する一考察 —— Mādhyandina 派と Kāṇva 派の比較研究——」『待兼山論叢 哲学篇』41, pp. 49–63.

梶原 三恵子

[2021] 『古代インドの入門儀礼』京都: 法蔵館.

後藤 敏文

[1994a] 「Chāndogya-Upaniṣad IV 1–3「Pautrayana と Raikva」」『印度學佛教學研究』42 (2), pp. 42–48.

- [1994b]「Veda 祭式の Brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1, 2, 3」『印度學佛教學研究』43-1, pp. 39-44.
- [2004]「新資料 Vādhūla-Anvākyāna の伝える『Purūras 王と Urvaśī』物語」『神子土恵生教授頌寿記念論集』京都: 永田文昌堂, pp. 845-868.
- [2007]「荷車と小屋住まい: ŚB śālām as」『印度学仏教学研究』55-2, pp. 220-224.
- [2011]「資料 ヴェーダ文献に見られるブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」篠田 知和基(編)『愛の神話学』名古屋: 楽郷書院, pp. 481-525.
- [2017]「Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』第21号, pp. 45-90
- [2019]「シュナツハシェーバ物語試訳 (AB VII 13-18 ~ ŚānŚrSū XV 17-27)」『国際仏教学大学院大学研究紀要』23, pp. 41-110.
- [2023]「Veda 文法研究ノート」『密教文化』251 高野山: 密教研究会, pp. 122 (43) -89 (76).

阪本(後藤) 純子

- [2015]『生命エネルギー循環の思想「輪廻と業」理論の起源と形成』龍谷大学現代インド研究センター.

辻 直四郎

- [1952]“Etymologia upanishadica.”『印度學佛教學研究』1 (1), pp. 258 (1) -242 (17).
[= 辻 1977, pp. 19-38.]
- [1977]『ヴェーダ学論集』東京: 岩波書店.

都築 みのり

- [2022]「ヴェーダ文献における *mitrām as/bhū* —— *idām bhū* 構文に合致する表現として——」『待兼山論叢 哲学篇』56, pp. 31-52.
- [2024]「*mitrām as/bhū* について」『印度學佛教學研究』72 (2), pp. 1-4.

堂山 英次郎

- [2004]「Ṛgveda V 60,6 —— *yaj* の意味と格支配, Imperativ II -*tāt* の機能を中心に——」『印度學佛教學研究』52 (2), pp. 61-65.
- [2005]『リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究』(大阪大学大学院文学研究科紀要モノグラフ編第45巻) 大阪.
- [2012]「胎児がしゃべる —— 古代インドの英雄神話における異常出生に関する資料——」『2011 年度 大阪大学大学院文学研究科共同研究 成果報告書 神話表象のアレゴリズム研究 —— 文学・哲学・レトリックに即して——』大阪大学大学院文学研究科, pp. 25-58.

中村 隆海

- [2007]「Veda 文献における *pra-√jñā* の語義と用法」松濤誠達先生古稀記念会編『梵文学研究論集 松濤誠達先生古稀記念』東京: 大祥書籍, pp. 111-137.

西村 直子

[2006]『放牧と敷き草刈り —Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究—』仙台: 東北大学出版会.

廣瀬 勤

[2024]『黒 Yajurveda 散文における Sattra 儀礼 ——行者たちの1年の共同生活——』京都大学博士論文.

(<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/server/api/core/bitstreams/d66efb96-7e58-4bbb-a7a3-df6091a86a3a/content>)

茂木 秀淳

[2001]『叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmaparvan 和訳研究 (XX) —』『信州大学教育学部紀要』103, pp. 125–136.

本論文の執筆にあたり、堂山英次郎先生から助言を頂いた。また、本論文の一部は、日本学術振興会特別研究員-PD に伴う特別研究員奨励費（研究課題／領域番号：25KJ0213）の助成を受けた成果である。記して感謝申し上げる。無論、誤りがあればその責任は著者にのみある。

（日本学術振興会特別研究員-PD；大阪大学 特任研究員（常勤））

SUMMARY

On the Vedic *X-bhūyam* √*bhū* Construction

Ryūtarō TAKEZAKI

By re-examining the examples of the *X-bhūyam* √*bhū* construction given in OERTEL 1926, only BĀUM 5.13.1, 2 (~ BĀUK 5.12.1) and KauṣU 3.2 (≈ ŚāṅkhĀ 5.2) are found to be both certain and significant in terms of language history. Although Śaṅkara ad BrahmaS 4.1.6 is also certain, it is attested much late and with somewhat different meaning. BĀUM 5.6.2 (~ BĀUK 5.5.1) and MBhār Poona crit. ed. 12.242.17ab var. lec. are found to be uncertain in terms of grammatical interpretation and textual criticism respectively.

This construction roughly means “becomes X, reaches the state of X” in BĀUM 5.13.1, 2 (~ BĀUK 5.12.1) and KauṣU 3.2 (≈ ŚāṅkhĀ 5.2). Although it is possible that this construction might have had some difference in nuance from the expressions *X* √*bhū* “becomes X” and *X-bhūyam* √*gam* “becomes X, reaches the state of X” (MS^p+), the difference is not great enough to be considered provable. In fact, *X-bhūyam* √*bhū* and *X-bhūyam* √*gam* seem to be used interchangeably in KauṣU 3.2 (≈ ŚāṅkhĀ 5.2), suggesting that their meaning or nuance is close enough.

Syntactically, the *X-bhūyam* √*bhū* construction is interpreted as a construction with an accusative of content, or, more specifically, as its subtype *idām* √*as* / √*bhū* construction. The word *X-bhūyam*, as an accusative of content, provides specific details about the meaning of the verb √*bhū*. Thus, the meaning of *X-bhūyam* √*bhū* can be traced back to “come to be (√*bhū*) in such a state, that is characterised by ‘becoming X’ (*X-bhūya-*).” It is to be noted that in the *X-bhūyam* √*gam* construction, the word *X-bhūyam* is to be analysed differently, i.e. as an accusative of destination.